

村田町

【むらたまち】人口1万0338人、4089世帯、高齢化率37.2%（2022年6月末）。町域は21行政区で構成、学区は小・中学校とも2校区だが、生活支援体制整備事業の圏域設定は第1層のみで第2層はない。生活支援コーディネーターは町社会福祉協議会に2人配置。協議体は、住民代表など約20人が参加する「支え合い会議」を年1～3回程度開催。事務局は同事業を所管する町健康福祉課。同課と町社協は月1回、定例会合を開き、同事業の方向性などを検討、調整する。

生活支援コーディネーターに聞く

まちづくりの 今

15

村田町

増やせ「元気ロード」歩む人

村田町

かとうちほ

加藤千穂さん

生活支援コーディネーターの加藤千穂さん（村田町社協事務所で）



コロナに負けない情報発信

「外出や交流を我慢する人たちに、『コロナ禍でもこんな暮らし方があっても、楽しく過ごすのを諦めないで』と、とにかく早く伝えたい」と

こう話すのは、村田町社会福祉協議会の生活支援コーディネーター加藤千穂さん。

町社協に入職し、コーディネーターの任に就いたのは2021年4月。ちょうどコロナ感染の第4波で、宮城県にも「まん延防止等重点措置」が適用された時期と重なる。住民の様子を知ろうにも、サロンやサークルなどの

地域活動は軒並み休止。戸別訪問もできない。

そこで、まち歩きを始める。

「散歩する人、畑にいる人：歩き回れば誰かに行き会います。声をかけて、話を聞きました」

コロナ禍の暮らしぶり、楽しみにしていることなどを尋ねる。さまざまな答えが返ってきた。山菜採り、庭いじり、畑仕事、小物づくり、短歌・俳句、カメラ散歩、ウォーキング、ごく親しい人同士のお茶飲みやおしゃべり、井戸端会議、ペットを飼う、などなど。コロナ収束後にしたいことを聞くと、温泉旅行、寄席通い、デパート巡りのほか、「マスクなしで大声で笑いたい」の回答も。

20人ほどに話を聞いたところで、その内容を「突撃！ みんなのおうち時間」と題した記事にまとめ、同年6月発行の生活支援コーディネーター情報誌「かとうちゃん通信」創刊号に掲載した。

記事のなかで加藤さんは、コロナ禍でも気持ち明るく保つコツをつかんでほしいという意図を説明したうえで、次のように記している。

「畑やお庭で作業している方の姿が多く見られました。声をかけると『やることがいっぱいあるよ』という方も。村田町の場合『畑やお庭がある』という環境は一つの資源になるかもしれません」

情報誌はA4判1枚の表裏2ページ構成で、カラー印刷。2～3か月に1回程度発行し、全戸配布する。2022年7月時点で第5号まで出した。第3、4号（21年11月、22年3月発行）では、連続で移動販売の特集記事を組んでいる。どの販売車が何時ごろ、どこに停車するかが一目でわかる時刻表をつくって掲載。これが「便利」「わかりやすい」と反響を呼ぶ。

特集に連動して加藤さんは、買い目の弱者が多い地域の実態把握を進めた。その成果に町地域包括支援センターからの情報も加味し、販売事業者に対して新たな停車場所を提案。今年7月までに2か所増やすことに成功している。

このほか情報誌では、「村田暮らしの生活の知恵」として、干し柿づくりなどの名人を紹介。また、「地域で見つけた笑顔のおすす分け特集」では、路肩や農地で作業する人たちが、休憩中におしゃべりの花を咲かせる様子を写真入りで載せた。

さらに、「元気の秘けつ」「人生を楽しむ秘けつ」などをテーマとする高齢者へのインタビュー記事、「知る人ぞ知る！ 町の趣味活動」と銘打ったサークル特集、「日々の暮らしのちょっとした変化」と題するコロナ下の工夫——たとえば散歩と公園でのおしゃべりを組み合わせた健康づくり——の紹介も行っている。

まちづくりの 今

15

村田町



かとちゃん通信第5号「笑顔のおすそわけ特集」に掲載された「たけお会」。高齢男性たちが環境整備作業の合間、和やかに一服（写真提供:加藤千穂さん）

かとちゃん通信創刊号(1面)。手描きのイラスト付きで「元気ロード」の解説を掲載した。世代を問わず関心を引く

社会福祉法人
村田町社会福祉協議会
生活支援コーディネーター情報誌

かとちゃん通信 創刊号

2021年6月1日発行



↑↑はじめての山菜採り体験中!!

地域の情報を
求めて
どこまで
行く!

生活支援コーディネーター
加藤 千穂
(かとう ちほ)

生活支援コーディネーターは

暮らしやすい地域づくりをするのが仕事です!

はじめに

「かとちゃん通信」では、生活支援コーディネーターとして地域の活動にお邪魔させていただいた様子の紹介や地域の方にとって生き生きとした生活のきっかけになるような情報を紹介していきたいと思っています。なお、2か月に1回の発行を目標としていますが、時々不定期発行になる場合もあります。ご了承ください。



地域のみ谷さんがず〜と

「自分らしく」

暮らしたい村田町に

するために、活動していきます!

人生の分かれ道

元気に楽しく生活する
秘訣とは?

「元気ロード」を歩む人を
増やしていくために…
こんなことをしていきます!

集める

まずは、地域にすでにあるものや困りごとの把握をします!

広める

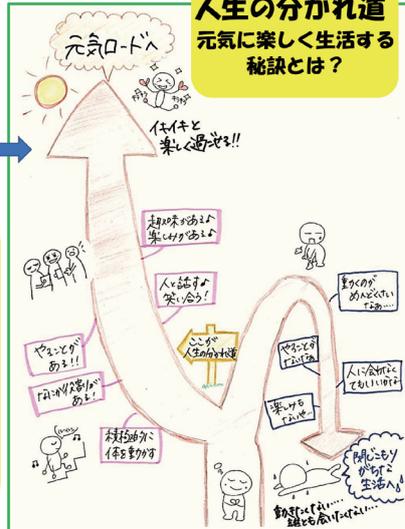
地域の情報や「イキイキ生活」を送るきっかけになるような情報をお届けします!

探す、育てる

交流できる場を探したり、趣味や特技が活かせる場、新たに活躍できる場をつくり、地域に元気人(ピト)を増やしていきます!

創る、考える

「あったらいいな」と思うものを地域のみなさんと一緒に考え、必要な人を繋げながら実現に向けて動きます!



特技持つ人の活躍の場構想

ポップでカラフルな誌面デザイン、住民生活に寄り添う記事、簡潔でわかりやすい文章。これらが相まって、

「村田暮らし」の知恵やライフスタイルに関する地域情報誌の様相を呈し、高齢者から子育て世代まで幅広い層に読まれている。
取材・発行を重ねるごとに加藤さんの知名度は上昇。生活支援コー

ディネーターより、むしろ「かとちゃん通信の人」として知られる。
取材はまさに体当たり。どこかへ出向く道すがら、人が集まっているのを見かければ声をかけ、話をする。
「取材を」「インタビューを」と言えば恥ずかしがって遠慮する住民が多いが、畑仕事・山菜採り・郷土料理・音楽・そのほか何でも相手の特技を見つけ、教えてと頼めばオーケーが出やすい。聞き取った話を原稿にし、「こんな形で記事にしたい」と相手に見せる。まず断られないという。
加藤さんが得意とするクラリネット演奏をてこに、サロンやサークルに入り込むこともしばしばだ。それがきっかけで、町で50年近い歴史を誇るジャズのビッグバンド「ワゲスターズ」のメンバーにもなっている(アルトサクソスを担当、表紙写真)
多彩な活動を展開する加藤さんだが、目指すところはあくまでも、暮らしやすい地域づくりや健康づくりのあと押し。本人の言葉を借りれば、「元気ロードを歩む人を増やすこと」
元気ロードに関しては、創刊号に手描きのイラスト入りで解説記事が載せている。「役割がある」「やりたいうことがあふ」「人と話す、笑い合う」「趣味がある、楽しみがある」などが元気ロードの道すじだ。
コーディネーターの役割については、次のように書いた。
「暮らしやすい地域づくりをするのが仕事です! 地域のみなさんが

ずーっと『自分らしく』暮らしていきたい村田町にするために活動していきます!」
誰もが自分らしい元気ロードを見つけれよう、加藤さんは「多様な選択肢を提示したい」と意気込む。
情報誌はそのための手段で、現に元気ロードを歩む人を取材して紹介したり、既存の集いの場や各種サークル活動の情報を発信し続ける。
ちなみに、ワゲスターズのメンバーの大半は高齢男性で、「素敵に元気ロードを歩むお手本」とのこと。
取材などの過程で、何らかの特技や専門的な知識・経験を持つ人が多く見つかる。将来、その人たちが講師に住民向けミニ講座を開講、活躍の場と集いの場づくりにつなげるといった構想も描く。
加藤さんは秋田県由利本荘市生まれ、仙台市育ち、村田町在住の32歳。社会福祉士。横浜市の地域活動交流コーディネーター、同町の地域おこし協力隊などを経て現職。ボランティアコーディネーターや、生活支援サポーター制度「地域お助け隊」(有償ボランティア)の事務局も兼務する。モットーは「心の赴くままに」。仕事も私生活も自分の感性との調和を大事にしてきた。
「だから、村田での暮らしも、いまの仕事も、大好き」
好きと言える生き方こそ、究極の元気ロード。自ら率先して歩んで行く。

令和4年度生活支援体制整備事業市町村担当者向け説明会を開催〈7月6日〉

生活支援体制整備事業の目的や宮城県における事業を改めて確認し、多様な主体が参画した地域の支え合いづくりが推進されることを目的に、市町村担当者を対象としたオンライン説明会を7月6日（水）に実施しました（主催：宮城県、宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局）。30市町村より52人の参加がありました。

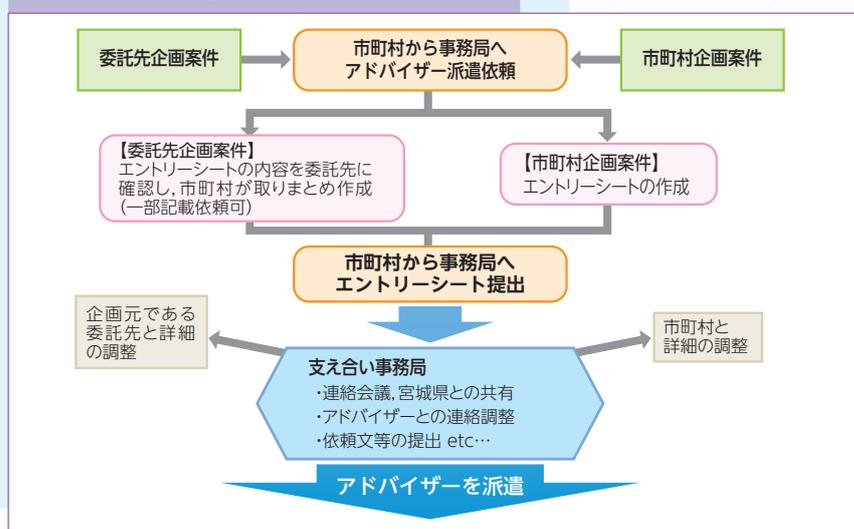
はじめに、県保健福祉部長寿社会政策課地域包括ケア推進班より、高齢者をめぐる現状と、地域包括ケアシステムを具体化するための第8期みやぎ高齢者元気プランについて説明があり、厚生労働省による市町村伴走型支援モデル事業に関する情報提供を行いました。

次に、県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局が行う市町村等への訪問やアドバイザー派遣（通年）、情報交換会（11～12月予定）について事業説明を行いました。なかでも、市町村等からの依頼に基づき同連絡会議会員を派遣する「アドバイザー派遣」は、協議体や専門職対象の研修会での講演、庁舎内研修会での講義、関係者間打ち合わせでの

助言などに活用されていることを紹介。本年度より、市町村が窓口となり、エントリーシートによって事務局へ派遣依頼する方法に変更となったことを説明しました（図）。

続いて、CLCより、本年度の生活支援コーディネーター養成研修の体系およびWEB版情報紙の発行について紹介し、研修申込についても市町村が参加希望者をとりまとめて事務局へ一括で申し込む方法に変更になったことを説明しました。

アドバイザー派遣申し込みフローチャート



宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局（宮城県社会福祉協議会）
〈2022年4～7月期〉

鳴子地域支え合い推進会議を開催〈7月19日〉

大崎市の鳴子地域づくり委員会は、2層協議体として「鳴子地域支え合い推進会議」を7月19日（火）に開催しました。セブンイレブンジャパン、日本郵便、鳴子公民館、大崎市社協鳴子支所、大崎市市民福祉課、大崎市社会福祉課など19人が出席。今年度メンバー交代があったことから、改めて生活支援体制整備事業の基礎知識を学び、関係団体との連携を図ることを目的に開かれました。

はじめに東北福祉大学教授の高橋誠一さんが講演し、「地域での安心した暮らしには、制度と地域のつながりの両方が必要」と解説。介護保険のサービスでは提供できない、人と人のつながりや、支え合いの大切さを再認識し、自分たち流で楽しむことでお互いさまの気持ちが育まれると話しました。

そのうえで、協議体メンバーが自らの取り組みを紹介。鳴子地域づくり委員会からは「地域内企業との連携や、住

民が集う居場所づくりに力を入れていきたい」という話があり、セブンイレブンや日本郵便からは見守り支援の取り組みが情報共有されました。また、大崎市社会福祉課から、住民が気軽に集う居場所の事例紹介があり、「居場所づくりをサポートしていきたい」とのお話がありました。

それらを受けて、講師のさわやか福祉財団インストラクターの渡辺典子さんが、住民自身が役割をもって活動することをサポートする、大河原町の「ほっとあい」の活動を紹介。「見守りとは、日常的な自然な関わりの中でお互いが気遣い合うこと。地域の交流の場や居場所から、仲間としての共感が生まれ助け合いが生まれている」と話しました。まとめとして、高橋さんが「地元企業を含む社会資源が生活圏域の中にたくさんあることで、生活がしやすく、地域のつながりがより強くなる。地域に合わせた展開をしていくためには、協議体のような話し合いの場を積み重ねていくことが重要」と総括しました。